

◆教育活動が機能していないことに対する考察

「学校と社会」第3章では「教育における浪費」の問題について述べている。これは、当時の世間一般の学校における教育活動が機能(効果が生れていない)していないことに対してのデューイの考察と考えられる。ここで使われる浪費とは、教育が個人的な発達を助長することができなくなったこと(教育が機能しない)、組織を欠いたところに起こる「経済と能率の増進」が上手くいかなくなること(教育が上手く機能しない?)であろう。

「第一義的な浪費は人間生活の浪費であり、在学中における子どもたちの生活の浪費、不適切なゆがめられた準備が生み出す後年の生活の浪費である」 ← 学校の浪費を決定づけるもの

◆教育現場の浪費とは

デューイが教育現場の浪費として考えたものは、2つある。1つは、上から下へと発達してきた学校制度の各部分の不統一である。2つは現実の生活からはなれた、不自然で人為的な状態の学校制度があることである。

1. 上から下へと発達してきた学校制度の各部分の不統一

「私は学校教育の種々なる部分が相互に孤立していること、教育諸々の目的が統一を欠いていること、教科および方法が首尾一貫していないことにたいしての諸君の注意をもとめたい」 p 80 10行

幼稚園から大学に至る学校の発達の歴史をとらえながらデューイは「教養と訓練」ということを問題としている。幼稚園では教授というよりはむしろ子どもの道徳的発達に目的がある。しかしながら小学校は読み・書き・算を習得するとことを目標とすることに不統一がある。

2. 現実の生活からはなれた、不自然で人為的な状態の学校制度

「われわれは学校制度を社会生活とう大なる全体の一部として眺めなければならぬ」 p89、8行

- ・生活からの学校の孤立 → ミシシッピ川が近所を流れていることに驚くなど経験と結びつかない
- ・学校と生産活動の結びつき → 商業地理・商業算術などそれぞれ孤立して教える

◆学校が孤立から脱却し、社会との有機的な関係を確保するために

実践的な活動の理論における二つの側面の工合(やりかた)の提案、二つの側面の均衡をたもつことに意義

1.社会的側面において実際的な活動や学校のそとの実生活との関連

図書室→ 理論と実践の有機的な関連と考えるべき

2.個人的側面において、子どもの行動に対する要求、表現に対する要求、なにごとかをなし、構成的であり創造的であろうとする欲求との関連

◆考察

「学校を生活と関連せしめよ。しからばすべての学科は必然的に相関的になるであろう。全体としての学校が全体として生活と関連せしめられるならば、学校の種々の目的や理想—教養・知識・実用—は個々ばらばらのものではなくなるだろう」 p 107

→ 孤立し、日常生活から離れきってしまった学校に、実社会という現実をいれようとするデューイの思想は、現在の学校における我々の課題でもあり高く評価する。この投げかけを現場でどう活かすべきか・・・